

都市研究の展望と基本的変数について

本学助教授

福 永 安 祥

都市は、一定の空間地域に高密度の集中居住現象を伴った社会的機能の集積体である。したがって、それは、「人間がつくりだした最も複雑な社会的集合体」(L・ライスマン)といふことができる。いま、われわれは、昭和四十二年四月以来、東京都日野市に調査のフィールドを設定し、次に掲げる諸君の調査報告にみられる如く、その研究を着実に進めてきているが、ここでは、都市研究の従来の経過を必要限りにおいて展望し、都市の調査研究の具体例を明らかにし、都市研究の指標を示すことによって、われわれの研究の進むべき方向の定礎を試みたいと思う。

現代の都市研究は、その発端に二つの源泉を有している。その一つは、イギリスにおけるブースのロンドン調査、ラウントリのヨーク市の調査などの経験的調査⁽¹⁾であり、他の一つは、十九世紀末以降において、都市生活を社会学理論との関連においてとらえようとした、テンニース、ウェーバー、ジンメル、ゾンバルトなどのド

イツの諸文獻や、さらに、デユルケーム、マツキーパーなどの研究にまで遡ることが出来る。(2)

とくに、ジンメルの都市に関する小論文(3)は、都市住民の社会心理的側面に焦点を向けたもので、その学風は、ペルリンに学んだシカゴ大学のパークをへて、現代都市社会学の父といわれるワースに深い投影をみせている。

やがて、都市問題の最盛期、一九一〇年代のアメリカにおいては、東部海岸地方の都市の急激な膨脹と工場地帯の建設などにより、スラム街などの多くの社会病理現象を生起して、都市問題の存在が自覚されるにいたった。

この実態の究明をめざして、Society of American Sociologists が成立し、ピッツバーグ市調査を発端として、スプリングフィールド市調査などの多数の都市調査が実施され始めたのである。これらの都市問題に触発されたから、都市の社会学的研究は、パーク、バーجز、マツケンジーらの勤務するシカゴ大学の人々によって、(1)シカゴ市をその研究対象として、(2)“Natural area”としてのスラム街における病理的現象に重点をおき、(3)ケース・スタディ(事例研究法)の調査技術を駆使し、(4)方法的には、生態学的アプローチに立脚する、「シカゴ学派」の形成を導いて、アメリカ独自の学問体系の発展をもたらすにいたった。

イギリスにおける都市研究は、社会福祉調査と密接に結びついていて、アメリカ社会学の現況にはるかに及ばず、また、ヨーロッパ大陸の諸国においても、都市の形態がすでに完成されていて、アメリカにみられた如き深刻な都市問題をひきおこすにいたらず、都市の社会学的研究は、「アメリカン・サイエンス」の本領の感がある。

ドイツの社会史家H・マウス(4)は、現代のアメリカ社会学の発展の転期を画した大きな業績として、タマスとヅナニエツキーによる「ポーランド農民」、パークとバーجزによる社会学の古典的概説書「社会学序説」(“An Introduction to the Science of Sociology” 1921) および論文集「都市」(“The City” 1925)の三冊をあげて、これらの業績が、現代社会学の発展の出発点をなしたことを指摘している。

パーク、バーجز、マツケンジー編になる論文集「都市」は、一九二五年シカゴ大学から出版されたもので、掲載された論文は、それぞれ別個に独立して発表されたものである。パークは、この論文集が、都市の

社会生活の研究をすすめていく上での一般的概説 (General Introduction) として寄与するものであると述べている。

パークの論文は、第一章「都市―都市環境における人間行動についての提案」、第二章「新聞の自然史」、第三章「地域社会と青少年の非行」、第四章「地域社会とロマンティックな気分」、第五章「魔術―精神性と都市生活」、第六章「浮浪者の心」の五章。パージスは、第七章「都市の発展―調査計画序論」(有名な都市同心円の理論が述べられている)、第八章「地域社会事業は科学的基礎をもちうるか」の二章。マツケンジは、第九章「人間社会の研究の生態学的アプローチ」。最後の第十章は、ルイス・ワースによる文献目録にあてられている。

この論文集において、パークは、都市は「心の状態であり、慣習や伝統の集合体であり、またこれらの慣習の中に本来含まれ、この伝統とともに伝達される組織または態度や感情の集合体」(The City is, rather, a state of mind, a body of customs and traditions, and of the organized attitudes and sentiments that inhere in these customs and are transmitted with this tradition.) と定義して、都市を、自然の産物、とくに、人間性の所産とみなしている。したがってパークによると、都市は、(1)地理的単位、生態学的単位であると同時に経済的単位であり、(2)それ自身の独自の文化型によって特徴づけられている文化地域 (Cultural area) であり、(3)場所及び人口とともに歩む機構と行政機関 (machinery and administrative devices) のすべてをもち、有機的に関連しているものとして、場所及び人口、を都市と考える。それは、一種の精神的物理的機構 (psychophysical mechanism) であって、その機構に含まれる個人的利害と政治的利害を通して、共同体的表現 (a corporate expression) を見ることが出来るのである。

パークによると、都市の構造は、その基礎を人間性におくものであって、人間性そのものの表現に他ならない

とするのである。しかも、一度、都市が形成されると、こんどは、一個の自然的事実として、それ自体を彼らの上に強制し、逆に居住者をつくりあげるようになってしまふのである。パークは、都市の地理学的観点からする研究に対して、人間生態学 (Human ecology) の観点からする研究を主張し、その研究方針は、シカゴ学派の学問的伝統をなすにいたっている。

シカゴ大学において、パークやバージスの指導の下にあったルイス・ワースは、「アーバンイズムの理論」の確立を通して、現代都市の分析の理論的枠組を設定することにおいて、現代社会学に大きな寄与をなしており、その影響は、米国からさらに日本、ヨーロッパ諸国にまで及んでいる。

ワースのアーバンイズムの理論は、一九三八年に発表された論文 ("Urbanism as a way of life, A. J. S. vol 44, 1938) に主として展開されているが、この論文は、ワースの都市社会学を集約したものである。ワースによると、都市—産業社会 (urban—industrial society) と、村落—民俗社会 (rural—folk society) とをコミュニティの理念型とみることによって、現代文明に現われる人間結合の基本的モデルの分析視点をうるることができるのである。

かれによると、都市は、「社会的に異質的な諸個人の相対的に大きい、人口稠密な永続的な定住地域」 ("a relatively large, dense and permanent settlements of socially heterogeneous individuals") あるいは、「大量の異質的な諸個人の相対的に永続的な稠密な定住社会」

("a relatively permanent, compact settlements of large numbers of heterogeneous individuals") と定義されるが、その場合、都市社会学者の中心問題は、都市に典型的に現われる社会的行為および社会的組織の諸形態 アーバンイズムの諸要素をなすもの——を発見することにある。

そして、アーバンイズムとは、「人間の集団生活の特殊な様式」 (a distinctive mode of human

From? life"）であり、「特徴的な都市的生活様式を構成する諸特性の複合体」("the complex of traits which makes up the characteristic mode of life in cities") と理解されている。したがって、都市化 (urbanization) は、アーバンイズムの諸要素の発展、拡大を示す過程であって、「都市の発達とむすびついた生活様式を明確にする諸性格の蓄積強化」("that cumulative accentuation of the characteristics distinctive of the model of life which is associated with the growth of cities") であり、それは、単に人びとが都市とよばれる場所にひきつけられ、その生活体系のなかに組込まれていく過程だけをさすものではないのである。要するに、都市があたえる影響にせられていくところの人々に明白に現われる「都市的」と認められる生活様式の方角における変化を意味している。

そこで、都市の社会学的研究は、アーバンイズムを構成するところの諸要素を抽出し、分析することにおかれる。このため、ワースは、都市人口の三変数、すなわち、住民数 (number)、人口密度 (density of settlement)、異質性 (degree of heterogeneity) をとりあげて、都市生活の性格を説明し、多様な大きさと型の都市の相違を考察できるとみている。このような複合的で多面的なアーバンイズムの諸現象は、ある一定の基本的アプローチによって分析することが可能となる。すなわち、ワースは、「特徴的な生活様式としてのアーバンイズムは、経験的に三つの相互に関係している視点 (perspective) から接近できよう。すなわち、(1)人口の基礎、技術および生態学的秩序からなる物質的構造としての視点、(2)特徴的な社会構造、一連の社会制度および典型的な形態の社会関係をふくむ社会組織の体系としての視点、(3)典型的な形態の集合的行動に加わり、特徴的な社会統制の機構にしかう、一組の態度、観念と一群のパースナリティーの視点」がこれである。これらは、人間生態学、社会構造論、都市住民の社会心理学にそれぞれ相応するものであるが、ワースは、これら相互に関連した三側面の研究を通して、都市生活の相互関連性の究明をめざしたものと考えられる。

さて、「都市社会学における第二次大戦までの時期が、自国のなかの都市と農村の比較研究という狭い視野によって特徴づけられていたとすれば、現在は、広範な国際的比較研究によって特徴づけられなければならない。」(E・ライスマン)のである。そこで、テキサス大学のショールバーク(Gideon S. Shorbar)は、アメリカの都市社会の研究資料から、都市社会学の普遍化を試みることは願であるとして、「比較都市社会学」(Comparative Urban Sociology)の構想を示している。

ショールバークは、都市の記号的な比較研究のための基本的変数(Key Variables)として、(1)都市、(2)文化的価値(Cultural Values)、(3)技術、(4)権力、の四者をあげている。最近の都市研究は、都市の特定の側面についての部分的研究や、また、理論や仮説をテストする実験室としての立場から進められるものが多く、都市の全体的把握に欠けることが多いことが、これまで多くの人によって指摘されている。

ショールバークのあげた基本的変数の一つ、都市は、生態学的パターンの諸類型を説明しうる独立変数と考えられており、人間の相互関係の社会的側面、都市の構造的機能の側面が重視されている。

今日、一九六〇年代は、オ二の都市問題の時期とみることができると言える。カリフォルニア大学のK・デイヴィス教授は、「一九九〇年代までは多分世界の人口の半分以上が、十万人以上の人口をもつ都市に住むようになる」と述べているが、新しい都市問題の季節に当って、都市研究が、一國の範囲にとどまらず、グローバルな形においてとらえられることに留意すべきであらう。

二

都市の理論的考察とともに、地域社会の事例研究がはじまって、リンダの「ミドルタウン」、ウォーナーの「ヤンキーシリーズ」をはじめとして、多数の研究成果が発表されて、今日の都市社会学の発展に大きな寄与をなしてきている。

リンド夫妻による「ミドルタウン」(R.S. and H.M. Lynd, "Middletown, 1929) 其の続編「ミドルタウンの変遷」("Middletown in transition, 1937) は、バーク・ウオーナー! とならんで、アメリカ都市社会学の三大古典の一つとされている業績であり、また、social research の典型的文献として挙げられているものである。リンドのこの研究は、その後のウオーナーなどの都市研究に大きな示唆を与えて、文化人類学と社会学の結合を促した記念碑的業績といわれている。

「ミドルタウン」は、アメリカ中西部の田舎町 インディアナ州マンシー(Muncie) の仮名であって、実際の都市名をあげて地域社会の生活面を論議する際における紛糾をさけるために、「ミドルタウン」という仮の名称が使用されたのである。そして、「ミドルタウン」をアメリカの小都市の代表的ケースと見做して、この町を精密に調査することによって、アメリカの小都市の三十五年間(一八九〇年—一九二四年)の産業革命の過程を明らかにすることをめざしたものである。

この研究が、いわゆる social sciences と異なる点は、一つの事例によってすべての同種類の事例を代表させ、あらゆる先入観や実際目的から離れて、社会事実の観察と研究に従事することによって、そこに生起する問題から社会生活の研究に対して新しい理論的接近を試みようとした点にあると考えられている。

したがって、その研究内容は、人間生活の主要な行動領域の全般に亘るものとなり、しかもそれは、アメリカの文明社会の生活に係属するのみならず、たとえば、オーストラリアの原住民の生活にも適用しえられる客観性を有すべきことが要求されたのである。

「ミドルタウン」の研究は、ある特定の理論の実証をめざすものではなくて、むしろ、観察した事実を記録し、それによって問題を提起し、集団行動の研究について新たな観点を示唆することをめざしているのである。

したがって、過去三十五年間について観察された行動の変化の諸傾向の点において、「ミドルタウン」の現代の生活の、動態的な機能的な研究 (a dynamic functional study) を目的としている。そこで、

現代のアメリカの都市の人々の行動は、つぎの六つの基本的活動に集約されるという仮説に立って、問題領域が設定された。

一、生計の樹立 (Getting a living)

二、家庭の形成 (Making a home)

三、青少年の教育 (Training the young)

四、余暇の利用 (Using leisure in various forms of play, art, and so on)

五、宗教活動への参加 (Engaging in religious practices)

六、地域社会の活動への参加 (Engaging in community activities)

調査は、一九二四年一月から一九二五年六月まで、リンド夫妻と調査スタッフとが「ミドルタウン」に住込んで、地域社会の内部から住民の行動を観察するという参与観察の方式がとられた。過去三十五年間の都市生活の歴史の変遷を明らかにするために、一八九〇年と一九二四年の兩時点に調査の重点がおかれた。

この調査の方法的特色として、(1)地域生活への参加 (participation in the local life)。

(2)記録文書の検討 (examination of documentary material)。(3)統計資料の編集 (compilation of statistics)。

(4)面接調査 (interview)。(5)質問紙調査 (questionnaire) など

それぞれの調査方法が併用されたことをあげることができる。面接調査は、一二四の労働者家族、四〇の実業家家族について実施され、必要に応じて質問紙調査が実施された。

調査の対象となる地域を選定する基本方針として、(1)現代のアメリカの生活を可能な限り代表しうる都市であること。(2)同時に、全体的研究において緊密な同質性を保持しうる都市であること、を目標としている。

その条件をみたすために、(1)穏和な気候の土地、(2)現代の社会変動に伴う諸問題をかかえている急速に成長している都市、(3)高度の機械生産を伴った産業文化、(4)単一の工場を主体とする工場都市 (one - industry

town)でないこと、(5)産業活動とともに、実質的な地域文化の生活が存在すること、(6)顕著な特性や尖鋭な地域問題の存在しないこと、(7)米国の中西部の都市であること、などの諸条件が考慮された。

また次の条件をみたすために、(1)人口二五〇〇〇人から五〇〇〇人までの都市であること。一九二〇年の国勢調査に基づき、一四三の都市の中から「ミドルタウン」が選定された。(2)衛星都市ではないこと、(3)黒人や外国生れの人の少ないこと、などの諸条件が考慮された。そして、オハイオ、インディアナ、イリノイ、ミシガン、ウイスコンシンの多数の都市を踏査した上で、「ミドルタウン」が調査対象地として選定されたのである。

「ミドルタウン」の人口は、一八八五年に約六〇〇〇人、一八九〇年には三五〇〇〇人に達している。全人口の九二%が、米国生れの白人 (*predominant white*) で黒人は約5%外国人は約2%にすぎず研究はすべて白人層を対象として実施された。周囲の人口三万人以下の近接都市とは、六〇マイル離れていて、汽車で約二時間の距離にある。それ以上の大都市とは、汽車で半日の距離にある。また、「ミドルタウン」の全体を支配するような大工場は存在しておらず、一九二三年六月三日現在で、一〇〇〇人ないし二〇〇〇人程度の大工場が三、三〇〇人から一、〇〇〇人程度の工場が八、操業中であつた。

調査の内容についてみると、(1)生活計の樹立に関して、生活費の獲得の過程、それに伴う職業的態度、経済状態、社会問題など。(2)家庭の形成に関しては、求愛、結婚、子女の教育から家政及び家庭生活に關するすべての社会過程。(3)青少年の教育については、青少年訓練の諸過程、学校生活、教育担当者の生活。(4)余暇の利用については、その種々相と改善方法。(5)宗教活動への参加については、王座な宗教的信仰、儀礼、儀式及び宗教指導者などの宗教生活の諸過程。(6)地域社会の活動への参加については、集團生活と政治機構の諸機能、集團的連帯性の構成ないし破壊の過程などについて研究している。

「ミドルタウン」は、アメリカの小都市生活の研究を通して、アメリカ文化の顕著な特徴をなす都市内の變動の諸相を描き出すことに成功しており、社会学の古典であるにとどまらず、アメリカ文化に關するベストセラー

の一つとして、今日にいたるまで多数の人々に広く親まれている。

「ミルトタウン」について、ロイド・ウォナー (W. L. Lloyd Warner, 1898-) とポール・ラント (Paul. S. Lunt) によるマサチューセッツ州ニューベリーポート (Newburyport, Massachusetts) の調査は、その調査地域がヤンキーシティー (Yankee City) の仮称によって行われており、その成果も「ヤンキー・シティー叢書」(Yankee City Series, 1941~1947, Yale University Press) として公刊されている。この調査は、(1)体系的な地域社会の分析方法を確立したこと。

(2) 地域社会の調査にもとづき、階層構造の理論を提唱したこと。(3) E P と I S C の二つの調査方式を確立したこと。(4) これまで未開社会を主な研究対象としてきた文化人類学を現代社会の研究に適用したこと。などの諸点によって高い評価をうけている。

「ヤンキーシティー叢書」

オ一卷 「近代地域社会の社会生活」

(The Social life of a Modern Community, 1941)

オ二巻 「近代地域社会の階層組織」

(The Status System of American Community, 1942)

オ三巻 「アメリカの人種集団の社会組織」

(The Social System of American Ethnic Group, 1945)

オ四巻 「近代工場の社会組織」

(The Social System of Modern Factory, 1947)

都市の社会学的研究は、これまで、二つの大きな流れをもって発展してきている。二つの理論の流れのなかで、より古くより一般的なのは、都市と農村とを対比し、比較を行なって都市社会と非都市社会との違いを強調する対比理論であって、それは、テンニース、ウエーバー、メーソン、デュルケイム、ベツカー、ソローキン、ジンマーマンなどによって代表される。ソローキンは、ジンマーマンとの共著「都市農村社会学原理」(P. A. Sorokin and C. C. Zimmerman, Principles of Rural-Urban Sociology, 1929)において、都市と農村とを対比し、八つの基準——職業・環境・自治体の大きさ・人口密度・住民の異質性と同質性・社会分化と階層・移動性・相互作用の組織——をあげて、都市社会の特徴を規定している。

農村と都市の比較

| 著者 | 農村のあるいは非都市的カテゴリー | 都市的カテゴリー |
|---|--|---|
| テンニース ウエーバー メーソン スペンサー デュルケイム ベツカー レッドフィールド | 伝統的 地位 軍事的 機械的連帯 神聖的 民俗 | 合理的 契約的 産業的 有機的連帯 世俗的 都市 |

都市と農村とを対比し、全く別個のものとしてその特徴を把握しようとする多くの試みに対して、デューイは、その論文 (Richard Dewey, "The Rural-Urban Continuum," A.J.S. July 1960) において、多くの著者の主張する都市的特徴と、非都市的特徴とがきわめて曖昧であって、都市と農村とを明確に区分しようような共通の特徴についての意見の不一致のはなはだしいことを確認している。かれは、都市問題に関する一八の著書と論文を分析し、一八人の著者のうちで「異質性」(heterogeneity) のみが、一人の人によって支持されるのみで、あとは、意見は多くの方面に分れて、不一致がはなはだしかったのである。

TABLE 1
ELEMENTS IN DEFINITIONS OF URBANISM

| | Anderson | Ilergel | Carpenter | Cole | Erickson | Gist and Halbert | Greer and Kuhe | Hallenbeck | Lee | Queen and Carpenter | Quinn | Redfield | Ritner | Shelky <i>et al.</i> | Stimmel | Stewart | Wirth | Woolston |
|----------------------------|----------|---------|-----------|------|----------|------------------|----------------|------------|-----|---------------------|-------|----------|--------|----------------------|---------|---------|-------|----------|
| Heterogeneity | | | | X | X | X | | X | X | X | | X | X | | | | X | X |
| Impersonal relations | | | X | X | X | X | | | X | X | | | | | | | X | X |
| Division of labor | | | X | X | X | X | | | X | X | | | | | | | X | X |
| Anonymity | X | | X | X | X | X | | X | X | X | | | | | | | X | X |
| Mobility | | | X | X | X | X | | | X | X | | | | | | | X | X |
| Segmental roles | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Class differences | | | | | | | | X | | X | | | | | | | X | X |
| Predatory relations | | | | | | | | X | | | | | | | | | X | X |
| Emphasis on time | | | | | | | | | X | | | | | | | | X | X |
| New family role | | | X | | | | | X | | | | | | | | | X | X |
| Employment patterns | | | X | X | X | X | | X | | | | | | | | | X | X |
| More female employment | | | X | X | X | X | | X | | | | | | | | | X | X |
| Multiple dwelling units | | | X | X | X | X | | X | | | | | | X | | | X | X |
| Secularism | | | | | | X | | | | | | | | X | | | | |
| Non-agricultural life | | X | | | | X | | | X | | | | X | | | X | | |
| Cosmopolitanism | | | | | | X | | | | | | | | | | | X | X |
| Tenancy | | | | | X | | | | | | | | | | | | X | X |
| Complexity | | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Tolerance | X | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Superficiality | X | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Low fertility | | | | | | | X | | | | | | | X | | | X | X |
| Sophistication | X | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Commercialization | X | | | | | | X | | | | | | | | | | X | X |
| Liberalism | | | | | | | X | | | | | | | | | | | X |
| Automation | | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Literacy | | | | | | | | | | | | X | | | | | X | X |
| Creativity | | | | | | | | | | | | | X | | | | X | X |
| Blasé attitude | | | | | | | | | | | | | | | X | | X | X |
| Stereotyping | | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Critical attitude | | | | | | | | | | | | X | | | | | X | X |
| Utilitarianism | | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Formal controls | | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Interdependency | | | | | | | X | | | | | | | | | | X | X |
| Subjective outlook | | | | | | | | | | | | | | | | | X | X |
| Intense occupational space | | | | | | | X | | | | | | | | | | X | X |
| Social participation | | | | | | | X | | | | | | | | | | X | X |
| Transiency | X | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Individualism | X | | | | | | | | | | | | | | | | | |
| Objectivity | | | | | | | | | | | | | | | | | | X |
| Practicality | | | | | | | | | | | | | | | | | | X |

つぎに、都市と農村との特質の相違を承認した上で、両者を連続するものとする都市Ⅱ農村連続説が、一九四〇年代以降に主張されはじめている。レッドフィールドは、著書「ユカタンの民俗文化」(Robert Redfield, *The Folk Culture of Yucatan*, 1941) のなかで、メキシコのユカタン半島における現地調査に基づき、民俗社会と都市社会とのあいだの変化を、連続的な変化と考えて、都市Ⅱ農村連続説の理論的説明を試みている。レッドフィールドの理論は、(1)かれの理論が他の理論家よりも明確であること、(2)かれの選んだ要素は、他の研究者によっても最もしばしば用いられているものであること、(3)かれの理論が現地調査に基づいていること、などの諸点において、とくに注目を集めている。

レッドフィールドとその協力者たちは、メキシコのユカタン半島の一地域における都市(Meriden)、町(Village)農村(Casa Kom)、部族の村(Tzuc)を、一九二七年から一九三六年にかけて、実態調査を行ない、これらの四つのコミュニティの相違は、特定の変数の大きさによって特徴づけられることを確認したのである。レッドフィールドは、民俗社会を都市社会から区別する一〇の戦略的変数をあげて、これらの一〇の変数が、農村と都市とをむすぶ連続線を位置づけるものと考えている。

「われわれの調査した四つのコミュニティを都市、町、農村、部族という順序に並べると、コミュニティのなかにあるいくつかの社会的あるいは文化的特徴が、一方の極から他方の極へと進むにつれて、累進的に増加しあるいは減少する。部族の村と農村を比べた場合、農村と町を比べた場合、あるいは町と都市を比べた場合、後者の方が前者よりも、(1)孤立性が少なく、(2)異質性が高く、(3)労働の分業が複雑で、(4)貨幣経済が発達しており、(5)宗教性の少ない世俗的な専門職業者をもち、(6)社会統制という点で組織度が低く、力の弱い家族制度をもち、(7)非人格的な統制手段に依存する度合が高く、(8)インディアン系ばかりでなくカトリック系の信仰や慣習に対して関心が薄く、(9)病気を道徳的あるいは単に慣習的な規則を破ったために起こると考える傾向が減り、(10)個人に大きな行動と選択の自由を与える」(R. Redfield, 第十二章「民俗文化と文明」—P. 338—39)

いま、われわれは、新しい地域社会調査に出発を始めている。われわれは、これまでの都市の理論的考察と事例研究の上に立って新たな、日本の都市に即応しうる都市研究の基本的変数を設定して、調査の進行に当らねばならないと考えている。それは、(1)地域集団、(2)経済生活、(3)社会階層、(4)権力構造および(5)分化の形態に要約することができよう。

- | | | | |
|-----|---|-----------|------|
| (1) | ダニエル・ラーナー編 | 社会科学入門 | 教養文庫 |
| (2) | 鈴木広編 | 「都市化の社会学」 | |
| (3) | ◇ | ◇ | |
| (4) | Heinz Maus, A Short History of Sociology, (Ziegenfuss の社会学辞典の英訳版 1962) | | |